

設楽町のツキノワグマ

最近テレビや新聞でツキノワグマ(以下クマという)の話題が多く報道されています。設楽町内でもたびたびクマの出没が広報無線で呼びかけられています。平成十七年まで町内では、クマとニホンジカは確認されていないのですが、では町内のクマはいつごろから出るようになったのでしょうか。

同年九月には旧三都橋小学校近くの栗畑に、たびたび栗の実を食べにやってきました。幸い人と遭遇することもなく、栗の木の上にクマ棚が二ヶ所残され、話題になることはありませんでした。この頃のクマはともて警戒心が強く、クマの方が人に会わないように警戒していたようです。

平成二十二年六月二十一日、

設楽町西納庫でクマがイノシシの罠で捕まりました。このクマは生後二歳のオスで、二歳とはいえ迫力満点でした。愛知県県の絶滅危惧種で殺すことも逃がすこともできず、福島県会津若松市にいる私の知り合いに預かってもらうことになったのです。二年ほどエサ代を送っていましたが、やがてエサ代もクマの存在も忘れてしまい、ずいぶん無責任であったことを思い出します。



西納庫で捕まったクマ



栗畑のクマ棚

令和七年十月、会津の知り合いにクマを預けてから十五年経ちました。偶然ネット上にクラウドファンディングでエサ代を募集しているのを見つけて、とても迷惑をかけていることを知ったのです。早速お詫びに行こうと計画を立てました。ところが数日後、クマによる人的被害が放送され、その後立て続けに被害が広がってしまい、何となく行きづらくなってきました。

多くの専門家は野生動物が増えた原因について意見を述べていますが、私の持論は、人

間の社会生活によって野生動物たちも増えたり減ったりを繰り返しているようです。

江戸時代から明治初期頃、この地域にもオオカミ・クマ・シカは現代よりはるかに多く生息していました。集落の周りはシシガキなどで防御するのですが、野生動物による被害はともて多く、農作物の被害はもちろん、オオカミやクマによって人の被害も記録に残っています。

明治中期頃には農業従事者は銃を持ち、動物を捕獲しやすくなりました。商業狩猟が普及したこともあって、集落周辺の野生動物は激減したように思います。

昭和に入ると、燃料が薪から化石燃料に変わり、外材の流通によって森林を利用する人が少なくなりました。森林は生活環境の変化と人口の減少によって荒廃が進む半面、野生動物が生息するのに適するようになってきます。こうしたことから、野生動物たちは数を増やし、昔の自然環境に戻っているように思います。町内の九〇%は山林であるため、今後目撃だけでなく出会うことも多くなりそうです。

クマの出没や人身被害を防ぐため、環境省自然環境局でクマ類の出没対応マニュアルが公開されています。

まずクマと出会わないようにするには、鈴やラジオなど音の出るものを携帯しましょう。人の存在をクマが気付くより先に知らせることが必要です。

特に悪天候や夕暮れ時、クマが利用しそうな穴や倒木の陰、岩陰や尾根の乗り越えには、より一層気を配る必要があります。私たちも事前にクマの生態や痕跡確認など注意点を研修し、学習することが必要になってきました。

実際にクマと遭遇した場合、私たちにできることを考えてみましょう。遠くのクマに気付いた場合は、落ち着いて静かにその場を離れていきます。急な動きや大声をあげてクマを刺激してはいけません。近くにクマがいることに気付いた場合は、やはり落ち着くことが肝心です。時にはクマが近付いてくることがあります。この場合は落ち着いてクマとの距離を取り、ゆっくりとクマを見ながら、静かに語りかけながら後退します。クマは逃走するものを追いかける習性があるため、背中を見せ逃げ出すと、攻撃性を高め追いかけてくるので、慌てて走って逃げはいけません。

近距離で遭遇した場合、クマによる直接攻撃が起こる可能性があります。引っ掻いたり、噛みつく行動をとりますが、一撃を与えた後、逃走する場合は

多いため、両腕で顔面や頭部をガードすることが大切です。町内では今のところ、クマによる人への被害はありません。しかし、クマに出会う可能性が高くなっているため、十分な対策が必要です。

(設楽町文化財保護審議会委員 加藤 博俊)